

「森銑三刈谷の会」だより 39(2025/2/15)

発行 2025/2/15 (月刊・メールでの投稿歓迎)
例会 第3土曜日 14:00-16:00 市中央図書館 参加自由

バックナンバー 刈谷市中央図書館>森銑三刈谷の会
共同代表 神谷磨利子・鈴木 哲 tetsu_s@katch.ne.jp

39:2025/1/18(土) 竹中良枝・神谷明子・神谷美恵子
「森銑三『武玉川選釈』を読む」参加15人

当日の主な資料 編集 神谷磨利子

- ・『武玉川』慶紀逸撰。俳諧の高点付句集。初篇 1750 年刊行、15 篇まで。二世紀逸撰で 16-18 篇(1776 年)まで。
- ・『徳川文芸類聚 11(雑俳)』1914 年
- ・森銑三共著「迷い子の太鼓(雑俳)」『日本人の笑』1942 年
- ・森銑三「落葉籠」武玉川『日本古書通信』1955 年
- ・森銑三『武玉川選釈』1984 年
- ・山脇英雄校訂『武玉川』1-4 1984/10-1985/10

長年読み解き続けた『武玉川』への銑三さんの思い

竹中 良枝

銑三さんは江戸の文芸雑俳の良さ・おもしろさを長年『武玉川』を読み解き少しずつ発表されながら、亡くなられる一年前に『武玉川選釈』として出版、熱い思いで遺されたことに敬意を表します。

銑三さんの選釈のお陰で江戸の文化雑俳にすんなり触れられ、今回皆様と一句一句を読み合えたことに感謝申し上げます。長嶋さん独自の選釈も頂け、楽しい会となりました。

『武玉川選釈』の「跋」に「雑俳の作者は身をその外に置いて人生を傍観してゐるといつたところがあります。それだけにその句は淡泊ですが、淡泊な中にまた捨て難い味ひを持つてゐます」の一文をしっかりと銑三さんが明示されていることを知り、嬉しく思いました。

読初は先師の一句武玉川 良枝

皆さんと共に読み味わった会

神谷 明子

「森銑三『武玉川選釈』を読む」に声をかけていただきましたが、全く知識が無く、初めて耳にする書物なので「どうするの?」という感じでした。でも「三人でやれば怖くない!」の意気込みで乗りました。私も森銑三・柴田宵曲・池田孝次郎共著『日本人の笑』を手に入れ勉強しました。

雑俳は銑三さんが『武玉川選釈』の「跋」で言われるように「人事を主として軽いおかしみを覗った句」が並んでいて、どの句にも笑いを誘われたり、なるほどと共感できたりすると思いました。それがまた七・七の14文字で表現されていることも驚きでした

1月の会ではいくら資料があってもずっと話で進める自信も知識もないので、皆さんと共に読んだり味わったりできて良かったです。水面に投げた石から水輪ができるようにいろいろな話ができおもしろかったです。それというのも雑俳が身近なでき事や人の営みを表現しているからでしょう。今の時代にも共通する場面が浮かぶことも楽しかった。皆様のご協力に感謝します。

円卓を囲み雑俳読みはじめ 明子

雑俳も俳句も人生の日記のようなもの

神谷 美恵子

今回『武玉川選釈』を取り上げてくださって、大変勉強になりました。七・七の短い句の中に時代背景、人々の暮らし、思いがよく表されていて興味深かったです。

「雑俳の作者は人生の渦の中に巻き込まれないで、身をその外に置いて、人生を傍観しているといったところがあります」(「迷い子の太鼓」という文言に銑三さんの物事を見つめる深さを感じます。私も俳句を作るようになってから、物や物事を深く見つめるようになった気がします。雑俳も俳句も人生の日記のようなものだと思います。『武玉川』は作者たちの人生の一部分だったと感じました。

武玉川紐解く一と日春隣 美恵子

「唐崎は商売じみた雨が降り」の句を読んで

三ツ松 悟

「森銑三刈谷の会」に参加させていただきとても有意義な時を過ごさせていただいております。森銑三の著書も森三郎の童話もほとんど知らない身ではありますが、皆様の博識に接して遅まきながら象の足に触れる思いで刈谷が生んだ文豪の偉大な業績に感銘を受けています。

第39回「森銑三著『武玉川選釈』を読む」は何となく期待していた会で、開催日がずれて待ち遠しい思いをしておりました。これまで雑俳なる文芸に焦点を当てて考えたことがありませんでしたので、当日は『武玉川選釈』の抜粋解釈解説を通じ、大仰ですが俳諧史の認識を広げさせていただきました。

御指名を受けて慌てましたが「唐崎は商売じみた雨が降り」の感想として歌川広重の浮世絵近江八景「唐崎夜雨」に付いて少し喋りましたところ後で『武玉川』初篇が1750年の刊行であると教えていただきました。

歌川広重の近江八景浮世絵出版が1834年頃（天保5年）とされていますので『武玉川』初篇は凡そ100年前の作品集でした。

近江八景は16世紀後半の関白近衛信尹の和歌によって成立しています。『武玉川』の詠み人も近江八景「唐崎の夜雨」の風情を求めて雨の夜に琵琶湖のほとりを訪れたものと思われます。

そのころの唐崎の松は天正19年（1591）大津城主新庄直頼によって植えられた2代目の松で、『武玉川』の詠み人が訪れた時は植樹から150年ほどの時を経て成木と為し、枝葉は10間四方以上に広がり雨宿りが出来るほど均整がとれた美しい松であったと考えられます。

江戸の商人であろう詠み人は「夜の雨に音をゆずりて夕風をよそに名立つる唐崎の松」と近衛信尹の和歌の情景を思い浮かべようとしたのですが、つい見事に広がる松枝ぶりに見とれ、自らの商いもこの松の枝ぶりのように広がれば良いと、詩的な想念が商売繁盛の願い移行し雨音がけしかけている、その気持ち替わりの可笑しさを雑俳に託したものと思われます。

雑俳は浮世渡世の一面を捉えた庶民文芸で面白いと感じました。

〔編集者：「唐崎の…」の句は初篇収録と後で気づき失礼しました〕

楽しい江戸の雑俳

長 嵩 秀雄

初めて武玉川を読む機会を得ました。お陰様で、少しは江戸の文化の香りに触れる事ができ、感謝です。江戸の郷土文学という視点が新鮮でした。雑俳、川柳、黄表紙等を楽しめると更に良いですね。

私個人の気に入る・・・1 日蓮記読む婿は 入れ知恵 / 2 帰りをらいで あすは餅搗 / 3 聞いたかと問はれて喰ったかと答へ

江戸の人々の教養の深さを感じますねえ。

「かたみのぬれて届く五月雨」と「かたみも届兼る極月」

鈴木 哲

お三人のご発表は興味深かった。外山(1986)「読み初めは森銑三『武玉川選釈』にした」を目にしたときは「ぶたまがわ」と読んでいた。「むたまがわ」が正しいことを知ったのは昨年である。慶紀逸『武玉川』初編刊行が1750年で、大河ドラマ『べらぼう』の蔦屋重三郎(1750-97)の生年と同年であることも知った。

「かたみのぬれて届く五月雨」が曾我祐成(すけなり)・時致(ときむね)の仇討ちであることは伺っても十分には理解できなかった。山澤[校訂](1984)『俳諧武

玉川』3 (p.21)に「かたみも届兼る極月」(11:11)があった。

腰折れ「しがらみ多し我しらが増え」。

〔編集者：曾我兄弟は仇敵工藤祐経(すけつね)夜討ちの前に、母や虎御前らへの形見の品を持たせ長年仕えた家来を曾我の里に帰したと『曾我物語』(作者・成立年不詳)にある。その晩建久4年(1193)5月28日は五月雨が降りしきり、形見の品々もしつとりと濡れていた。「曾我物」は能・歌舞伎等で人気の演目だったから『武玉川』7篇(1752年)刊行当時の人々には「曾我」という文字が無くても分かったのだろう。ならば「かたみも届兼る極月」は「赤穂事件」の「忠臣蔵」を題材にしているのだろうか。〕

「雑俳」を読むのに必要な解釈や鑑賞の力

河橋育実

銑三さんの『落葉籠』の中の「雑俳の解釈」の項に「学生に暗記ばかりを強ひないで、解釈や鑑賞の力を養はせる必要がある」とありますが、外山滋比古さんの『思考の整理学』で押し付けられた事ばかりではなく、自分で考えなければならぬと同じ様な意味合いのことが書いてありました。

また 連歌師のことは『元刈谷の歴史』の中に連歌師の宗長は水野近守から多額な金品をもらったとあるし、水野信元は連歌師里村紹巴を歓待したとあります。そこから江戸時代に連歌が庶民の間にも発展していったと思えば自然なことなのかなとも思いました。

自分では全く関心の無い事柄から、銑三さんを知ることができました。発表のお三人に感謝します。

—短くなって届く言伝—

飯田 芳子

雑俳の定義から始まり選釈へと段階を踏んだ資料がいい。その中から「短くなって届く言伝」を拾う。俳句でもない、川柳でもない、この句は七・七である。資料例1を参考にすれば、脇句となる。言伝の難しさを表現して妙である。「て、に、を、は」が変わるだけでも意味合いが微妙に変化し、短くすればさて何の事であろうと思案の種になりかねない。伝達の手段が限られていた時代の日常に起こりうることを表現して見せた人々の感性の豊かさを感じさせる一句と思う。

一足の伸びやかなるや春立ちぬ 芳子

<紙面都合によりご投稿文面を一部編集しました：編集・神谷>

2025/2-3 予定

40:2025/2/15(土) 視聴覚室：神谷磨利子「森銑三(1895-1985)と師・井上通泰(1866-1941)」

41:2025/3/15(土) 視聴覚室：神谷磨利子「反町茂雄『一古書肆の日記』に見る森銑三の弘文荘時代」